

SPF豚 100頭一貫5年間 3Kから3T (たまには旅楽しむ) 養豚

横浜養豚業 渡辺 幸男
横浜市獣医師会 紺野 君子

1 横浜市の養豚について

昭和40年代の横浜の養豚農家は約1600戸あり、小規模では肉豚5～6頭から大きいところでは繁殖豚100頭～150頭規模の農家があったが、昭和40年代から50年代にかけて都市化が進み、特に横浜の中心地から離れた地域の大開発が進み、畜産環境問題の厳しい時代に入り畜産農家は激減した。

現在の養豚農家戸数は、14戸 繁殖雌豚1,155頭、種雄豚85頭、年間肉豚出荷頭数 約200,000頭、「はまぼーく」、「やまゆりポーク」の生産農家があり主に2系統の銘柄豚を生産している。

2 SPF豚の短期飼養の目的

効率の良い養豚経営をめざすためには、健康な豚を飼養することが最大の条件と考え、また365日休日のない養豚から3K(汚い、きつい、休日なし)から3T(たまには、旅、楽しむ)の経営をめざした。

- ① 健康な豚を肥育する。
- ② 少ない頭数で従来の収益を得る。
- ③ 豚に使われない養豚。
- ④ 休日をもうける養豚。
- ⑤ たまには旅楽しむ。

3 養豚場の概要

昭和38年から昭和55年までは繁殖豚30頭から40頭を両親が残飯で飼育、昭和55年に豚舎を建設し平成4年まで120頭の一貫経営を行っていた。豚舎建設の借入れ(5千万円)を返済し、一時休業に入り、その後、発想の転換を図り、平成5年から平成10年まで一般豚100頭一貫5年間経営、さらに平成10年9月からSPF豚100頭一貫5年間 平成15年から2サイクル目の経営である。

一日の労働力及び労働時間

本人 午前7時00分～11時00分、
夕方見回りのみ、無看護分娩
妻 午前8時00分～10時00分

4 SPF豚の導入時期と生産基盤

導入は月令をずらしてLWを1回に20頭ずつ導入し、飼養管理上集中的に種付け分娩・離乳・種付けが出来るよう効率の良い方法を考えた上で随時導入を行い、さらに繁殖豚の廃用、死亡事故等が生じても補充しない方式をとった。

SPF豚 繁殖雌豚 7ヶ月～8ヶ月令
ランド×大ヨーク 100頭
種雄豚 12ヶ月令以上
ディロック種 7頭

第1群及び第2群 同様の頭数を導入し100頭一貫5年間の経営を行った。

5 豚舎の休舎と開始時期

導入豚は母豚休養舎から使用を開始し、順次分娩舎・子豚舎・肉豚舎に豚が入り肉豚出荷後は各舎ほぼ10ヶ月から12ヶ月空舎になる。

空舎になったところから給排水、給餌ライン、豚房のメンテナンス及び豚舎の消毒が効率的にできる。

6 繁殖及び生産成績

SPF豚100頭一貫5年間の第1群と第2群の比較した。

第2群は初産にのPRRSが侵入し成績を下げている。

第2群は5年間の経営終了後に総合的に第1群と第2群の生産成績を比較するがこの報告では第2群の中間成績である。

豚舎の休舎と開始時期

各豚舎	一般豚終了	SPF豚 第1群		休舎期間	SPF豚 第2群	
		使用開始	終了時期		再開時期	終了時期
導入開始	—	10年9月	14年7月		15年1月	19年7月
肉豚舎	10年7月	11年5月	14年7月	16ヶ月	15年11月	
子豚舎	10年3月	11年3月	14年3月	16ヶ月	15年9月	
分娩舎	10年1月	11年2月	14年1月	18ヶ月	15年8月	
母豚休養舎	9年12月	10年10月	13年12月	13ヶ月	15年1月	
オールアウト	10年7月	—	14年7月			19年7月

休舎期間中作業
豚舎(築26年)全ての修繕、補強
給排水、給餌ライン、豚房のメンテナンス

繁殖及び生産成績①

項目	第1群	第2群 (中間成績)
繁殖生産期間	平成11年2月～13年12月	平成15年7月～17年12月
子豚総生産頭数	6,609頭	6,109頭
死産頭数 (無看護分娩)	549頭	615頭
1腹当りの哺乳開始頭数	(6,049頭) 10.0頭	(5,694頭) 9.45頭
1腹当りの離乳頭数	9.9頭	8.95頭
離乳日齢	24.1日	23.8日
育成率	91.5%	92.8%
分娩腹数	605腹	508腹
分娩回転数	2.24回	2.08回

繁殖及び生産成績②

項目	第1群	第2群
1頭当りの肥育開始頭数	22.5頭	19.2頭
肥育開始体重	25kg～30kg	左記に同じ
1頭当りの出荷体重	115kg～120kg	左記に同じ
1頭当りの出荷日齢	171日	178日
肥育期間	96日	103日
1日平均増体重	791g	721g
枝肉歩留率	66.7%	63.8%
事故率(肥育中)	2.4%	2.7%
総出荷頭数	5,845頭	4,843頭

16年1月～2月PRRS発生

SPF 豚 100 頭一貫 5 年間 3K から 3T (たまには 旅 楽しむ) 養豚

7 売上げに対しての経費の割合

一般豚 120 頭一貫経営では飼料費が売上げの 56.2%，衛生費が約 6.0% その他諸経費を差引いた場合収益が少なかった。

豚舎の休舎期間を設けて一般豚 100 頭 5 年間、SPF 豚 100 頭一貫 5 年間を比較した場合飼料費、衛生費の割合が低くなり、収益が増した。

8 保険衛生費の内訳 (SPF 豚第 1 群・第 2 群 1 年間の比較)

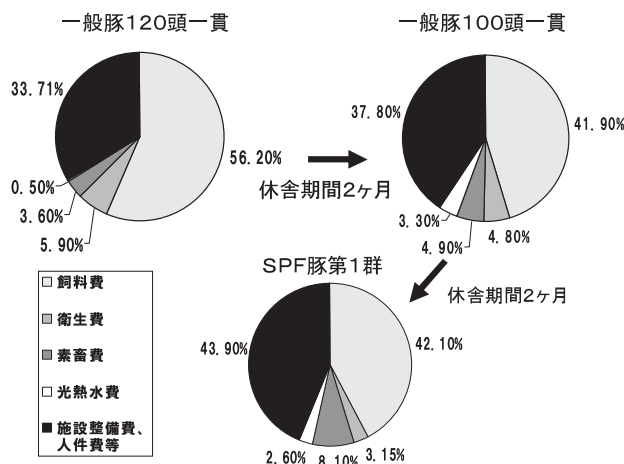
一般豚の保健衛生費は売上げの約 5.0% ~ 6.0%

を占めていたが、SPF 豚においては一般豚の約 1/2 以下であった。

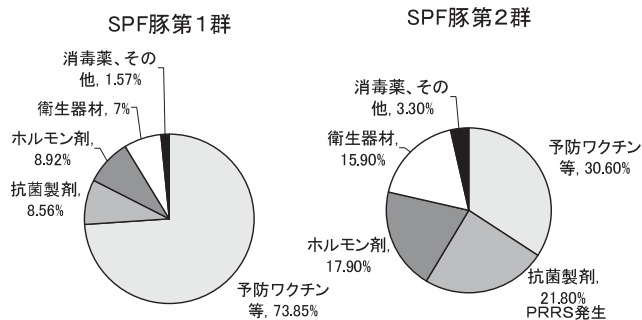
但し、第 1 群は初めての SPF 豚の飼養でもあり、特定疾病除去の SPF 豚であっても病気侵入の危険を避けるために予防的にワクチン接種 (日脳・AR・豚丹毒・肺炎等) を徹底した、そのため衛生費の割合は高くなっている。

一般豚の保健衛生費から比較すると SPF 豚の保健衛生費の比率の低さと飼養しやすさから第 1 群のオールアウト後、SPF 第 2 群の経営を再開した。

第 2 群は初産豚に PRRS が侵入したため、抗菌

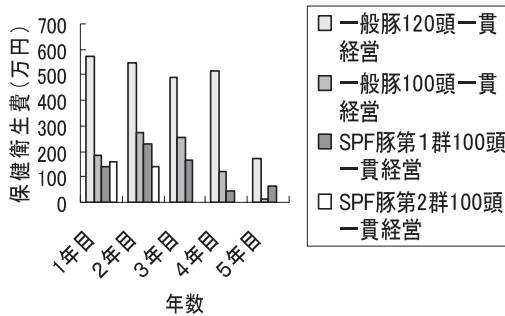


売上げに対しての経費の割合

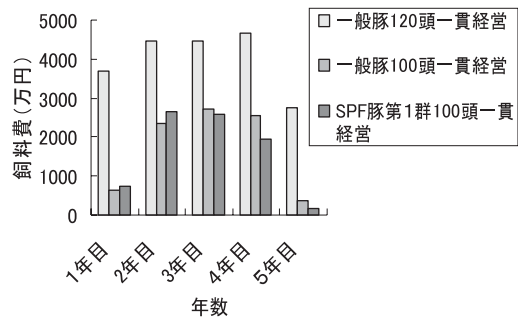


保健衛生費の内訳 (1 年間の比較)

保健衛生費の比較



一般豚とSPF豚の飼料費の比較



5年間の飼料費及び保健衛生費の比較

健康な豚と休舎期間を設けることにより効率的な養豚経営ができる。

製剤の割合が第1群の約2.5倍になった。病気が発生した場合には抗菌製剤費の割合が高くなる結果からも病気がない健康な豚を飼うことにより経営の安定化がはかれることが証明された。

9 繁殖豚の事故及び廃用状況

第1群 5年間終了時 廃用及び事故豚 16頭

第2群 2.5年間(中間) 廃用及び事故豚 19頭

第2群の中間の事故率は初産母豚のPRRSの影響が推測された。

10 まとめ

- ① 健康な豚を導入し飼育する。
- ② 豚の能力を生かす。
- ③ 一時休舎で経営改善。

④ 安全な豚肉の生産

⑤ ゆとりの畜産経営。

SPF豚も一般豚も飼養環境を整えるための休舎期間が豚の能力を引き出し、さらに健康な豚であれば食品を生産するものとして食肉の安全安心が実践できるものと考えます。

SPF豚も一般豚もこのまとめによる養豚経営を行うことが3K産業といわれる産業もやり方次第では3T(たまたに旅楽しむ)養豚が実現し、魅力ある養豚経営が実践できることから、後継者が育っていく業界に発展していけば幸いと願っております。

終わりに発表の機会を与えてくださったSPF豚協会赤池会長及びご指導賜った皆様に深謝いたします。